

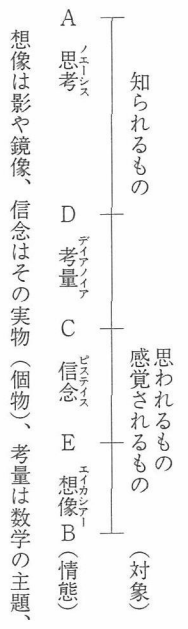
プラトン『国家』篇における
〈数学的なもの〉の問題

國嶋 貴美子

プラトンは主著『国家』において〈線分の比喩〉を語り、イデアを真実とするいわゆるイデア論に基づいて対話法と数学との関係を述べている。しかしその数学の情態に対応する線分が表すものはイデア、個物、イデアと個物との中間のもの(〈数学的なもの〉)などと様々に解釈されてきた。以下では最後の解釈を擁護し、考量と信念の線分が同じ長さであることの意味を考察する。

一 〈線分の比喩〉(509c-511e)

知識は有に、無知は非有に、思ひは両者の中間の生成に関わる(473c-487a)ことが示された後、多くの美しい個物に対応する唯一の美のイデアがあり、前者は見られ、後者は知られることが同意される。更に、太陽に擬えて善のイデアが存在と真理との原因であることが説明され(太陽の比喩 507b-509c)、続いて次のような〈線分の比喩〉が語られる。



思考はイデアを対象とする。四つの情態の明瞭さは対象の真理性と対応し(511e) AC:CB=AD:DC=CE:EB(∴DC=CE)に不等に分割された線分によって表される。AC対CB、CE対EBは実物対似像の関係である(510a)。考量は信念の対象(CE、個物)を手がかりに、説明なしに始原とされた奇数や偶数や図形(510c)などの仮定から考察するが、思考は個物を用いずイデアだけで、仮定を仮定として扱って仮定の元にある無仮定の始原へと遡る。

このあと、数学的諸学は国家指導者たるべき愛知者の学——対話法への準備教育であり、似像(生成)から実物(実在)への魂の目の転向を促す(洞窟の比喩 514a-519b)と語られる。その際 EB は生物の模型の影絵に、CE は生物の模型に、DC は生物の影に、AD は生物に擬えられる。

二 従来解釈

考量は数学の情態であるが、アリストテレスによればプラトンは、イデアと感覚的個物との中間に永遠不変だが唯一ではない〈数学的なもの〉を認めていた(Metaph. 987b14-18)。「国家」でも、考量の対象は常に有る(527b, 529c-d)と共に多であり(526a) また情態と対象とは対応し(511d) かつ考量は思考(AD)と思(CE)の線分の間に位置する。このことからアダムは、考量の対象は数学固有の対象、〈数学的なもの〉であると結論する。

他方、ネットルシップ、クロスとウッズリー、ガスリーらの解釈では、思考は善と関連したイデアを、考量は孤立したイデアを対象とする。しかしこの解釈では思考と考量とは同じものを対象と

するので、情態は対象に対応する (511d, 477cf.) という記述と矛盾するうえ、AD 対 DC が実物対似像の関係であることを説明できない。

またホワイトは、DC と CE とは共に感覚的個物を表すと解釈し、同じ個物が一方 CE では影や鏡像の実物として、他方 DC ではアイデアの似像として説明されているとする。しかしこの解釈は、DC が CB (感覚されるもの) ではなく AC (知られるもの) の一部であることと矛盾する。

三 511d の解釈

511d の「数学の対象は」は始原と共になら思考的であるにしろ」という言葉は、考量の対象はアイデアではないとする解釈と唯一矛盾する。しかし先に述べた難点があるため、考量の対象はアイデアではありえない。従って矛盾を避けるには、同一の事柄について「数学的なもの」とアイデアとを同時に把握しようと考えて以下のように説明するほかない。生成消滅する感覚的個物については知識は成立しないので (529b, 473c-487a, 508d) AD に達した人も CB に留まる人も個物 (CE) は知識できな。しかし後者は個物を見て思うだけだが、前者は個物を思ふと共にそれに対応するアイデアを知識し、個物をアイデアと関係づけてよりよく見る (520c)。こう考えなければ三つの比喩の導入部にある「知識の無い思いはすべて醜い」(506c) という表現は説明できない。さと同様に、数学は仮定から考察する学問であり、DC に留まる数学者であれ AD に達した愛知者であれ数学的考察に際しては考量しか持ちえない。しかし数学者は何の似像とも知らずに「数学的四角形」を考量するだけであるが、愛知者は数学的四角形をそ

の実物である「四角形のアイデア」と関係づけ、アイデアを思考しつつ数学的四角形を考量する。つまり仮定を「無仮定の始原」に遡って「始原と共に」説明する人は AD (思考) に達しており、「数学的なもの」をアイデアと共に「思考的に」把握できるのである。

四 「数学的なもの」の問題点

ガスリーの指摘するように、美や正義など数学以外の事柄については個物 (CE) とアイデア (AD) との中間物 (DC) がな。従って「シェウエットとキャンベル (B. Jowett and L. Campbell, Plato's Republic, Oxford, 1849) の $DC = AC + AD$ 、 $DC' = CE$ が順に実物と似像の関係であるなら、考量の対象は「数学的なもの」に限定できな。

しかし $DC : CE = AC : CB = CE : EB$ が成立しない以上、CE は DC の似像ではありえない。むしろ、ホワイトの指摘するように、「洞窟の比喩」の生物の模型 (CE) は生物の影 (DC) の似像ではなく生物 (AD) の似像である。また線分 CB は AC の似像であり、かつ $CE \neq CB$ 、 $AD \neq AC$ の上半分であるから、 $CE \neq AD$ の似像である。但し $DC = CE$ であり $AD : DC = AD : CE$ であることはホワイトの解釈のように DC と DE が共に感覚的個物であることを表すのではなく、AD (アイデア) には DC (考量の対象) と CE (個物) という別種の似像があることを示すと考えられる。個物がアイデアの直接の似像があり、中間のもの媒介なしに関係すると考えれば、考量の対象を「数学的なもの」に限定しても問題はないのである。